⑤　「憶い出の母校―65周年記念」―瓊林会編を眺める

本書の編集後記は言う。「明治38年創設以来、65年の風雪に耐え壱万有余の卒業生を送り出した母校校舎が六階建新校舎に生れ変るべく解体される」。そこで「我々在学中のままの母校の姿をアルバムに収めて同窓諸兄にお贈りする」ことにした。この言葉通りに、本書は解体前の旧校舎をA5判横綴じ20頁に収めた昭和45年7月刊の送別アルバムである。

①扉には西山上空から俯瞰した学校構内の全景写真。②「正門風景」は、「門扉・門衛所・拱橋」と「欄干の苔」を映す4葉のカラー写真。③「正面玄関」写真には屋上の「風見鶏」と65年の足跡で磨滅した「玄関の花模様タイル」。④「研究館(現在の瓊林会館)」と「階段部分」。⑤「講堂」と「階段部分とシャンデリア」。⑥「階段教室と廊下」。⑦「中庭の木立と校舎」。⑧「図書館と金木犀・閲覧室風景」。⑨「グランドと図書館遠景」。あと⑧「扶揺館と館内食堂」、⑨「東南アジア研究所(昭和37設立)」。それに⑩「学部長室と応接室」など。建屋以外では、⑪「歴代高商校長(十一代)・学部長(七代)・短大主事(二代)の肖像写真」、⑫「武藤文庫・稀覯資料」の数点。⑬「卒業生の記念植樹と石碑」。そして最後に青春の「憶い出アルバム」を掲げる。此処には「教官似顔絵―木村校長起稿の「自彊寮」額―浴室・談話室―射撃訓練―身体検査―浅野金兵衛先生と野球部―ボート部に諏訪神社長坂の友団旗の群れ」―そして「通学路には県立高女の娘たち」の姿が並べられる。かくて最終頁には「経済学部新校舎本館(昭和46年3月31日完成)の偉容。但し其処に人影はなく、やっと外装が竣工したばかり。

さて、本書を5年前の「60年アルバム」に比べると(余禄では先達の資料を借用するものの)解体される旧校舎への限りない愛借が編集動機になっており、昭和45年夏、母校最後の息吹きを、カラー写真にて拾った貴重な一冊になっている。

ところで瓊林会館が所蔵する資料には、本書以外にはもう一冊だけ当時の旧校舎を鮮明に撮影したアルバムが保存されている。それは「旧校舎モノクロ写真・34枚」と私が名付けたアルバムで、撮影者は川村邦男さん。(325×333mm)のルーズリーフ形式の市販アルバム帖に手札型の印画紙が綴じ込まれたものでネガもなく、撮影者ご本人の来歴も撮影動機も、私には分からない。撮影された写真は、心象風景を思わせる作品も多い。バンカラな同僚が下駄履きで闊歩した木造校舎の廊下。青春が煌めく図書館リノリューム貼りの閲覧机。このアルバムを静かに捲ると、お互いが自分なりに煌めいていた学窓の夏が昨日のことのように甦る。

☆本書の周辺☆
私はこの資料、を私有している故此処から絵を頂くことが多く、便利なアルバムである。